

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
周産期センター新生児医療センター長 兼小児科部長兼新生児部長	和田 芳郎
医 長	山本 昌周
医 長	三原 聖子
医 員	木村 幸嗣
非常勤医師	上山 敦子(9月まで医員)
非常勤医員	山野 由貴

—概要—

本年度のスタッフは、常勤医4名、3年目専攻医1名、2年目専攻医1名の計6名である。日本小児科学会が専門医研修制度を変更して3年目となる。当院は、阪大小児科プログラムに属しているが、専攻医(2年間の初期研修を終えた卒業後3年目以降の研修医)はまず基幹病院(大学病院等)に入り、必要に応じて関連病院で研修を行う制度である。基幹病院にどれだけの専攻医が入るかによって、関連病院に出る人数の比率が変わる。つまり、大学病院等での専攻医人数が少なければ、中での研修を優先するため、外に出せないというのが実情で、今後、小児科専攻医をコンスタントにりんくうに確保できるか、保証は何もない。阪大自体が大阪府の北部に位置するため、大阪府南部に位置するりんくうにはなかなか人を送りにくいと言われる。ポリクリ実習を受け入れ、見学や実習を通して、医学生時代からりんくうに馴染みをもってもらう必要がある。その為、2019年度からは大阪市立大学小児科研修プログラムにも参加している。

外来診療は、2013年度から1名の小児科医が外来専従で応援に入ってくれたこともあって、午前の一般診療は月曜～金曜まで2診制を確保し、火曜以外は3診制である。その他、慢性外来、1ヶ月健診、生後2週健診、専門外来として循環器外来(第2金曜、完全予約制)を行っている。RSウイルス流行期間中(当センターでは10月から翌年3月まで)第1、3金曜日にシナジスを該当児に接種している。NICU退院児の超低出生体重児を対象とした発達検査も市の子育て支援課の協力を得て、月1回継続的に実施している。

泉州二次医療圏における小児救急医療体制に関しては、2006年11月3日にオープンした泉州北部小児初期救急広域センター(日曜、祝日、年末年始、の9:00～22:00、土曜の17:00～22:00)がその主たる機能を維持している。入院が必要と思われる患児は、その診療時間帯に後送病院として、輪番制で行っている泉州地区6病院(和泉市立病院、泉大津市立病院、市立岸和田市民病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院)に紹介され、そこで最終的に入院の要否が決定される。2019年度から岸和田徳洲会病院がスタッフ減少を理由に輪番制から撤退し、

残り6病院の負担増となっている。加えて、消防隊からの救急車による搬送も輪番病院に集められる。広域センターの業務終了後、23時以降は、その日の輪番病院で従来の夜間小児救急が行われている。また、2014年4月5日から、旧泉佐野・熊取・田尻休日診療所が泉州南部初期急病センター(日曜、祝日、年末年始、の10:00～17:00、土曜の18:00～21:00、木曜の20:00～23:00)に名称を変え、泉佐野市りんくう往来北に移転し、夜間休日小児救急医療の一端を担っている。当院の小児救急輪番担当日は、毎月偶数週の日曜日17:00～23:00が広域センターからの後送病院担当、同23:00～翌6:00が一次救急診療対応時間帯である。

地域保健として、市町村の乳幼児健診に出務している。泉佐野市、泉南市の4ヶ月児健診にそれぞれ月1回、熊取町の4ヶ月児健診に年6回、1才半健診に年4回、田尻町の5ヶ月児健診に年6回、泉南市の4ヶ月健診に月1回、二次健診に年6回、常勤・非常勤医師が出務している。

泉州南部初期急病センターでは、泉佐野泉南医師会から参加できる小児科医の減少により、その維持が困難となり、かなりの比率で近大医学部小児科、大阪母子医療センター(旧大阪府立母子保健総合医療センター)、阪南市民病院、りんくう総合医療センターが担当している。当センター小児科医は第2・3土曜日18～21時を担当しており、出務回数は年20回以上に及んでいる。

公的乳幼児健診における医師不足解消の方策の一つとして2016年4月から開始となった、合同二次健診(すこやか健診)は泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町の2市2町の二次健診を月1回、りんくう総合医療センターに隣接する教育研修棟(サザンウイズ)2階に健診会場を設営し、医師3名(りんくう総合医療センター小児科2名、医師会1名)、保健師、助産師、看護師、栄養士、事務の参加を得て、毎月第2木曜に行っている。

医師不足は、予防接種を実施する医療機関の減少にも及んでおり、当センター出生児を対象に定期接種、任意接種を行っている。委託契約は貝塚市、泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町、阪南市、岬町である。BCG、子宮頸癌ワクチンは対象外であり、2歳以上の定期接種は行っていない。

この様に、当センターの小児科医は病院内にとどまらず、広く地域医療にも携わっているが、医師数を維持することは非常に困難である。関連施設である大阪大学小児科・大阪母子医療センターもスタッフ数は充分ではないとして、これら施設からの補充は見込めない。中規模病院の多い泉州南部二次医療圏における小児科医不足は、一つの施設が破綻すれば、連鎖的に機能不全となる危機的状況でありつづけている。

—実績—

2019年度一年間に外来を受診した患者(生後2週健診、1ヶ月健診、予防接種を含む)の延べ数(輪番救急外来受診患者を除く)は11,299人、月平均約941人、2018年度の受診児数が12,196人、月平均約1,016人であったので、ほぼ横ばいであった。

泉州医療圏の夜間休日小児救急輪番の受診児数は、506人で昨年度の466人に比べて、日勤輪番日が毎月1回となったために、増加した(表1)。入院児数は45人(8.9%)で昨年度31人(6.7%)と比べて、日勤分増加した結果となった。17時からの実数は前年度と横ばいである。受診児の重症度は相対的に低く、この傾向に大きな変化はなかった。

小児科一般病室の入院患者数は延べ282人、昨年度とほぼ同じであった。輪番救急外来からの入院児45人が占める割合は15%で、昨年度11.5%、一昨年は13%であったのでこれも横ばいであった。表2に入院児の主診断を示す。例年通り、肺炎、気管支喘息、喘息様気管支炎、RSウイルス感染症、ウイルス性腸炎、川崎病など急性感染症が大部分を占めていたが、周産期センター開設以来、新生児黄疸の光線療法治療入院の割合が高く、この傾向は今年度も同様であった。

病診連携によって紹介された患者の入院数は82人(29.0%)と昨年度88人(30.8%)とほぼ同数であった。

表1 夜間休日小児救急輪番受診児数(2019年度)

	2次救急 (9時～17時)*	2次救急 (17時～23時)	1次救急 (23時以降)	計
受診児数	53	86	367	506
救急搬送	29	56	36	121
紹介児数	24	30	1	55
入院児数	11(20%)	17(20%)	17(4.6%)	45(8.9%)

*月1回担当

—今年度の成果と反省点・来年度への抱負—

2016年度から始まった、2市2町合同による乳幼児健診の二次健診(すこやか健診)は、想定を受診児数よりも少なめで推移しているが、その機能は果たしているといえる。将来、小児科専門医を目指す、りんくう総合医療センター小児科の若い医師たちの研修の場ともなっている。慢性的に小児科医が不足している泉州南部地域では、年度毎に健診を担当する小児科医を確保することは市町行政側の負担にもなっており、集約化を行ったことで、乳児二次健診を3名の小児科医が継続して毎月実施できるようにしたことは、母児にとってもメリットは大きい。

医師の確保についての方策は、劇的な打開策とは言えないが当センターで研修をした医師達が小児科専門医となり再び戻ってきてもらえるよう、限られた人数ではあるが臨床面でのアクティビティを落とすことなく、新たな領域にも、チャレンジしていくこと、新生児医療と一般小児科診療をバランスよく研修できる施設として、阪大・大阪市大プログラムでアピールしていくことが挙げられる。

表2 入院児主診断名

感染症・寄生虫症		神経系・感覚器疾患		呼吸器疾患	
EBウイルス伝染性単核症	1	てんかん	2	RSウイルス細気管支炎	20
RSウイルス感染症	25	髄膜炎	1	インフルエンザ	3
ウイルス感染症	2	脳炎	1	ヒトメタニューモウイルス気管支炎	1
サイトメガロウイルス感染症	1	アセトン血性嘔吐症	2	マイコプラズマ気管支肺炎	6
ヘルパンギーナ	1	肉眼的血尿	1	咽頭炎	5
マイコプラズマ感染症	1	熱性痙攣	9	気管支炎	12
ロタウイルス性胃腸炎	5	無熱性痙攣	1	気管支肺炎	53
胃腸炎(細菌・感染症含む)	12	嘔吐症	1	気管支喘息	13
細菌感染症	2	痙攣	3	急性上気道炎	15
手足口病	1	痙攣重症発作	1	縦隔気腫	1
先天梅毒	1	消化器疾患		蝶形骨洞炎	1
帯状疱疹	1	右化膿性耳下腺炎	1	扁桃炎	1
百日咳	4	虫垂炎	1	泌尿・生殖器疾患	
溶連菌感染症	2	腸重積症	1	急性巣状細菌性腎炎	1
血液・造血器・免疫疾患		盲腸憩室炎	1	尿路感染症	8
高サイトカイン血症	1	皮膚・皮下組織疾患		溶連菌感染後急性糸球体腎炎	1
周産期疾患・先天異常・保育		じんま疹	2	内分泌代謝疾患・栄養障害	
新生児黄疸	13	伝染性膿痂疹	1	プロピオン酸血症	2
新生児発熱	1	蜂窩織炎	2	成長ホルモン分泌不全性低身長症	2
先天性ヘルペスウイルス感染症	1	筋骨格系・結合組織疾患		脱水症	1
損傷・中毒・アレルギー		若年性皮膚筋炎	1	低身長症	1
アナフィラキシー	3	川崎病	14	精神障害	
アレルギー	1	耳鼻咽喉疾患		せん妄	1
タバコ誤飲	1	中耳炎	2	空気嚥下症	1
咽頭創傷(歯ブラシ外傷)	2	良性発作性頭めまい症	1	合計	
外傷性帽状腱膜下出血	1			282	
食物アレルギー	1			紹介入院	
				82	
				紹介入院率	
				29.1%	